三島町 “日本で最も美しい村” サインデザインプロジェクト

−三島町の地域振興につながる機能看板の提案−

A2201231 渡部矩世

■研究の概要（背景）

三島町は福島県の西部「奥会津」に位置する、山に囲まれた人口約1800人の町であるが、人口の推移が年々と減少の傾向にある。しかし、昨年には三島町の「生活工芸」・「民俗行事」などが登録資源として認められ、「日本で最も美しい村」連合に加盟した。この連合は、失われたら二度と取り戻すことのできない景観や文化を未来に残し、地域が誇りを持って自立し、美しい村であり続けることを目指す団体であり、地域の資源の保護と地域経済の発展に寄与することを目的としている。また、2012 年には「三島町宮下地区屋号サインプロジェクト」に取り組み、2012 年度のグッドデザイン賞を受賞した。これをきっかけに、三島町では道路沿い看板や町内サインの再構成など、来訪者にわかりやすく、町の方々に愛着を持ってもらえるサインを整備することになった。私達、会津短大部と三島町の連携・協力によって、実地調査を通じて得たアイディアを基に、地域の特徴を活かした効果的なサインデザインを行い、村同士の繋がりを意識し、一つの地域として一体感を得られるような町内サイン・看板のデザイン提案を行う。

■研究の目的

三島町の登録資源である「生活工芸」・「民俗行事」や、景観・文化などの地域の特徴を活かしたデザインを考案し、町内随所で活用しながら全体のイメージアップを図るとともに、住民の地元意識を高め、三島町における道路沿い看板の整備や、各集落を含む三島町の特色活かした町内のサイン・看板に関連付けした機能を付加し、三島町全体の誘導経路表示の再構成を目的とする

■研究計画

実地調査 → 事例調査 → 分析 → デザイン提案・試作 → フィードバック調査

■研究のプロセス

●ヒアリング調査

…福島県大沼郡三島町にて調査を行った結果、現在の三島町における道路沿い看板の所在、機能・形態を把握するとともに、各集落を含む三島町全体の特色と、地域に根ざした独特の文化や景観の発見に繋がった。

三島町役場での打ち合わせ

実地調査の風景

●第一回ワークショップ

…宮下地区・三島町役場保育所にて「子供たちと’みしまの昔話’ワークショップ」を開催した。企画は会津大学短期大学部の柴崎恭秀准教授の研究室が行い、三島町役場の協力により、志津倉山に伝わる「かしゃねこ伝説」と、「高姫伝説」をみしま蛍になぞらえて、三島町のこどもたちに、地元の伝承について楽しく知ってもらえる機会として開かれた。役場の方の協力でこどもたちが集められ、「かしゃねこ」とは何か、柴崎准教授の独自の解釈を織り交ぜた「やさしいかしゃねこ」伝説の紙芝居の公演と、かしゃねこのお面作りを行った。続いて、「高姫伝説」を柴崎准教授の仮説に基づいて２匹の青い平家蛍と９８匹の緑色の源氏蛍のあわせて１００個の LED ライトでホタルを模して表現したものを製作し、出来上がったものを宮下地区の通りにまばらに配置した。このワークショップでは、こどもたちを含む三島の町民の方々は「かしゃねこ」というものについて認識はあるものの、その由来などを把握している人が少ないこと。また、地方に残った伝承に基づいたイベントを考案し、試行する過程でその由来や一説に対する考察や議論が生まれ、地域の記憶を探るきっかけになることがわかった。

三島ホタルを飾った様子

かしゃねこのお面で遊ぶ子どもたち

●第二回ワークショップ

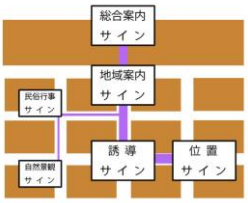
…宮下地区・三島町役場会議室にて、三島町にはどんな魅力があり、町に対する町民の方々が抱える思いをどうしたら形にできるかについて話し合いを行うディスカッションを開催した。このディスカッションは住民に対する三島の魅力発見を主な目的とし、三島町に住み続ける住民の方々からの目線で、三島のアピールポイントとなる情報の収集を行った。

1.三島の寺社仏閣・ﾊﾟﾜｰｽﾎﾟｯﾄ	6.三島の七不思議	11.三島の景色（ﾋﾞｭｰﾎﾟｲﾝﾄ、珍百景）	16.三島のお店	21.三島の植物
2.三島の言葉（方言）	7.三島の道	12.三島のイベント・慣わし	17.三島の宝物	22.三島の食べ物
3.三島の歴史・伝承	8.三島の思い出	13.三島の名人・達人	18.三島の歌	23.三島の名産・特産・有名品
4.三島の空き家	9.三島の遊び	14.三島のおもしろい人	19.三島の動物	24.三島の危ない場所
5.三島の看板	10.三島の遊び場	15.三島の建物	20.三島の飲み物	25.三島の施設　…など

■提案

●**概要**: [現在の三島町の看板所在地とその機能を分析、整理し、新たな三島町全体の看板の誘導形態を構成する。]

●**目的**: 住民に地元の良さについて、再認識を促すものとしてデザイン構成する。地区間の位置関係を明瞭にし、訪れる人々の指標としての機能を付加することによって、内外の交流を図るものとする。



●**特徴**: ① 調査結果から得た三島町の地域資源(ビューポイント・民俗行事、工芸にまつわる地)にポイントを設け、解説や紹介文を載せた看板を設置する。(「自然景観看板」・「民俗行事看板」・「位置表示看板」)

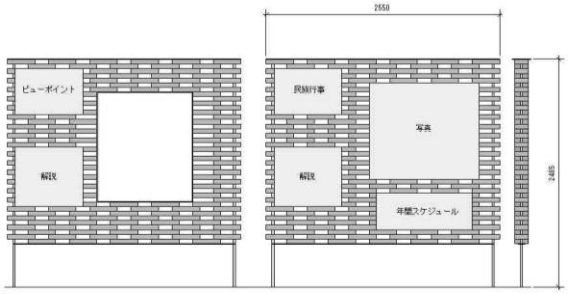
② 三島町を現在区分している 18 地区のそれぞれに、その地区を示す「**地域入り口看板**」を設置する。

③ 三島町の 18 地区の各地区に、地域の歴史と周辺の案内図を載せた「**地域案内看板**」を設置する。

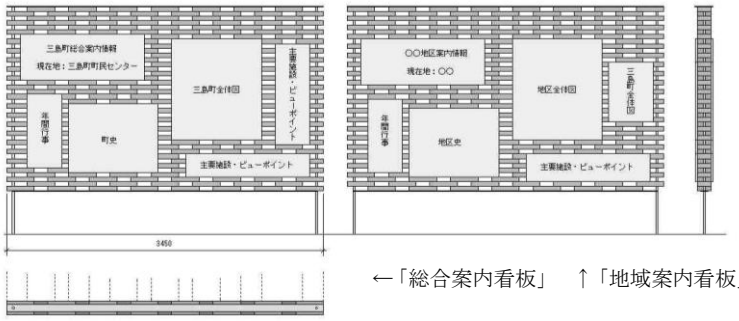
④ 三島町の中心となる場所に全体の誘導の起点となる「**総合案内看板**」を設置し、①～③との誘導経路を明確に関連付けさせる。

⑤ ①～④までの区間の誘導を補助する「**誘導案内看板**」を設置する。

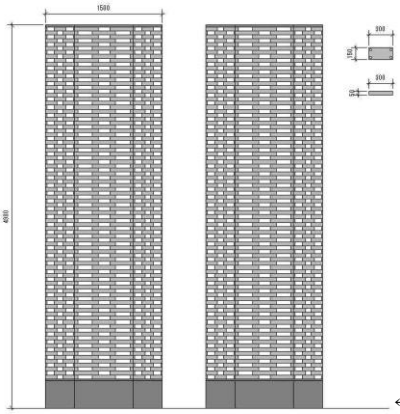
⑥桐が三島町の特産であることから、桐下駄の材木を輪積みにしたものを三島町の原風景のひとつとしてデザインのベースとする。

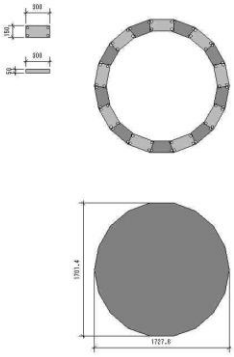


↑「自然景観看板」　↑「民俗行事看板」



←「総合案内看板」　↑「地域案内看板」





←「地域入り口看板」

↓「誘導案内看板」　↓「位置表示看板」

デザインのベースとなった桐下駄材の輪積み

■考察

自分のルーツとも言えるこの三島町であるが、今回の研究を通じ、今、日本が失いつつある原風景そのものの姿に触れ合うことができた。三島町のように、人口の減少や文化の喪失に悩む町村は全国に数多くあるが、この町に住む人々は自分の町や村に対して常に真摯であり、町で生まれ、育った人間がやりたいことや、できることを率先して実行し、行政がそれを支えるという印象を受けた。実際、まちづくりというものはそれを支える「ひとづくり」こそが、本質であると私は考える。今回の提案は町全体のサイン整備という目的の中に、この「ひとづくり」を促すために伝承や文化を伝え、知る工夫を凝らした。案内看板は本来、外部の人間に対して有効なものであるが、この取り組みにより、内外を問わず三島町を、そして自分が生まれ育った故郷を知る人間が増えるきっかけになってほしい。